

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com



県立熊谷女子高校 1

「出る杭は打たれず」世界へ

県立熊谷女子高校（以下、熊女）は1911（明治44）年、県立熊谷高等女学校として開校した。110年を超す歴史の中で培われた「出る杭は打たれない」。自由な校風を謳歌し、巣立った熊女生は約3万7千人。様々な分野で活躍する卒業生たちを紹介する。



年々、世界が小さくなる。多くの熊女卒業生がグローバルに活躍する。池上清子（70、1971年卒）はその代表格の一人。米ニューヨークの国連本部で働き、NGOに移っては途上国の家族計画に尽力。国連人口基金の初代東京事務所長にもなった。現在は長崎大学院でアフリカなど途上国の学生に公衆衛生などを教える。



長島は日本初の公子認女医・萩野の研究者でも知られた郷土史家だった



名前やあだ名からつけた「かきくみだ会」は仲良し5人組。池上の「元気の源」だ

110年を超す歴史 自由な校風



野菜づくりが趣味。「サイダのように自然に近い場所で幸せを見つめたい」と常見



大使館勤務は今秋まで。「現地の大学に進みイタリア語を極めたい」という新島

人、40年卒）や、所属していた英語部の顧問が応援してくれた。「熊女で『やるな』『やめる』と言われた記憶がないんです」

今春退官し、途上国の女の子たちを支援する国際NGOの理事長職に専念する。そんなアクティブな池上に欠かせないのが水泳。毎日1キロほど泳ぐ。当時、自由形、平、背泳ぎで25分泳げないと体育の単位をもらえなかった。夏休みもほぼ毎日、学校のプールに通ったたまものだ。

イスラム圏の暮らしや女性を紹介し続ける写真家の常見藤代（54、86年卒）は、内気な性格で勉強一辺倒。熊女ではあまり友達ができなかった。「人生を楽しんでいなかったですね。その反動が、大学に入ったから出ちゃって」。半年間、大学を休学してインドネシアで見ず知らずの家を泊まり歩い

た。社会人生活を経て、写真の世界へ。2003年、単独で遊牧生活をするエジプト女性のサイダと出会い、寝食を共にしながら7年間取材。昨年11月の熊女の創立記念式典で行った講演で、自然に身を委ねて、たくましく生きる、このサイダの話にも触れた。

日本貿易振興機構（ジェトロ）で日本を世界にPRする瀧幸乃（29、11年卒）。小1の途中まで米国で暮らした。帰国後、多様性の乏しい日本に息苦しさを感じた。熊女で文武両道を極めたいと、陸上部で走り高跳びに打ち込んだ。「勉強と同じ個人競技。ひたすら孤独と向き合った」と振り返る。そして「支え合う仲間、チームが大切」という価値観を得た。最も力をくれたのは同じ陸上部の仲間の存在。つらい時、「ネガティブな言葉をすべてポジティ

難問を解いたらケーキをおごってくれた数学の先生、朝補習の生徒のために朝7時にはストープに火を入れてくれた先生と、思い出は尽きないが、忘れられないのが東京外大志望だった3年時の級友4人。目指す言語は違っても励まし合って一緒に合格。「つらい受験期を乗り越えられたのは、やはり先生や級友のお陰ですね」

祖父にももらった児童書でイタリアにひかれ、今はローマの日本大使館に勤務する新島愛結（26、14年卒）。祖母も母も熊女出身。小さいころから身近だったが、決め手は中3のときに行ったアンサンブルマジョリティ部の定期演奏会。高さが2センチもあるコントラバスに一目ぼれ。「自転車です学できるし、勉強の時間も削らずに存分に弾ける」と進学を決めた。昼休みも練習したくて、「早弁」が日課だった。

「青春スクロール 母校群像記 熊谷女子高校」は、原則、第2埼玉面で土曜日に掲載します。

敬称略



インドで講演する瀧。現在は名古屋で日本の「ものづくり」と海外成長企業とのマッチングに励む

「青春スクロール 母校群像記 熊谷女子高校」は、原則、第2埼玉面で土曜日に掲載します。